

なん ぼく し てき

# 南 北 市 入 羽 糴

2016

第8号

遺跡コラム

「イルカ（謎かけ）」

イルカパーク（壱岐市勝本町）

長崎県埋蔵文化財センター

## イルカ（謎かけ）

長崎県埋蔵文化財センター 調査課 白石 渓<sup>けいご</sup>牙

壱岐の観光名所イルカパークをご存知だろうか。

周囲からはアヤシイとの批判もあるが、三十路を超えたおじさん（筆者）は、足しげく通っている。

平成7年（1995年）に壱岐市勝本町にオープンした観光施設である。年中無休、朝の8時30分から夕方の5時まで開園し、多くの観光客が訪れている。毎日3回、10時、13時、16時に「ごはんタイム」があり、サバ、アジ、シシャモなどのごはんを食べるのに合わせて、ジャンプをしたり、手を振ってバイバイをしたり、鼻から「ぎぎぎ」と音を出したり、日々の練習の成果を見せてくれる。将来的には、お客さんの指示で芸ができるようにすることを目指しているという。

ところで、このイルカ達。実は、かなり個性がある。

まず、一重まぶたや二重まぶた、口吻の長い短いなどの見た目の違い。また芸の得手不得手や食べ物好みなどに個体差がある。さらには朝が弱い子がいたり、先輩イルカと後輩イルカの確執（？）があったり、隣の水槽に注目が行っているときに飼育員やお客さんにアピールしたりなど、性格の違いもあるという。怒って水を吹きかけることもある。

飼育員さんに質問すると、野生のイルカと飼育されているイルカとの違いや、イルカがどれくらい潜水してられるのかなど、丁寧に教え



イルカパークのイルカ（ごはんタイム）

てくれる。筆者が観察したところ、通常1～2分間程度で呼吸をしているが、実は10～20分間も潜水することができるという。

規模は小さいが、イルカはもとより飼育員さんとの交流も楽しめる、壱岐の観光名所である。

さて、今ではイルカは愛護の対象となっているが、その昔イルカと壱岐の人々との関わりは、必ずしも良好ではなかった。今から35年前の1980年、「壱岐イルカ事件」が発生した。

事件の概要は次の通りである。壱岐では1958年からブリの曳縄漁法およびイカ釣り操業に対するイルカの食害が表面化し深刻化していったため、1977年からは追い込み漁によりイルカの駆除を始めた。これがアメリカの環境保全団体の目に留まり、1980年2月活動家の一人が壱岐の辰の島（たつのしま）において捕獲されているイルカ300頭あまりを、捕獲用の網を切って逃がした。この事件の裁判では、動物愛護の立場や、海洋資源を守る立場、また漁業者としての生活を守る立場など、様々な意見や思想や利権、さらには宗教や人種論までもが交錯して、ある意味では現代社会の抱えるひずみが顕在化した例といえるだろう。

この後、壱岐に来るイルカの数が増減したことから、壱岐を舞台とした論争は影を潜めたが、イルカ等、クジラ類の捕獲をめぐる問題は日本を取り巻く様々な国際舞台において、現在も続いている。最近、南極海での調査捕鯨は、シーシェパードが造船したマガマガしいバトルシップから攻撃を受けた挙句、国際司法裁判所によって調査捕鯨を禁止されてしまったし、また去年（2015年）6月には世界動物園水族館協会（WAZA）の議決を受け、事実上、追い込み漁でのイルカの捕獲は禁止されてしまった。この議決を受け入れない場合、日本動物園水族館協会（JAZA）は、今後希少動物の繁殖などにおいて海外からの協力が得られなくなるなど、受け入れを認めざるを得ない内

容だからである。

このように、近年のイルカとのかかわりの話となると、どうしても暗く重たい話になってしまう。ひとつには、クジラ類をめぐる様々な論点の中で海洋資源や鯨食文化を守る立場からなされる共存の試みが、多勢によって一方的に否定されているように感じられるためであり、もうひとつには、こうした立場であったとしても、イルカの見目の愛くるしさ、よく言われる知能の高さ、クジラ類にまつわる様々な美談を耳にすると、動物を利用して生きる、「人の業」のようなものを感じてしまうからかもしれない。

さてここで、イルカと壱岐との長いつながりを示す例を一つ挙げることにしよう。

壱岐市郷ノ浦町に所在する鬼屋窪古墳（おにやくぼこふん）である。古墳とは、石で作った遺体を収める部屋（石室：せきしつ）の周りに土を盛り上げお墓である。この古墳では周りに盛った土の部分が無くなってしまっており、長さ3m、幅2mもの大きさの石を積み上げた石室だけが

残っている。この古墳は、副葬品の年代から、7世紀後半頃（今から1350年ぐらい前）に作られたと考えられている。

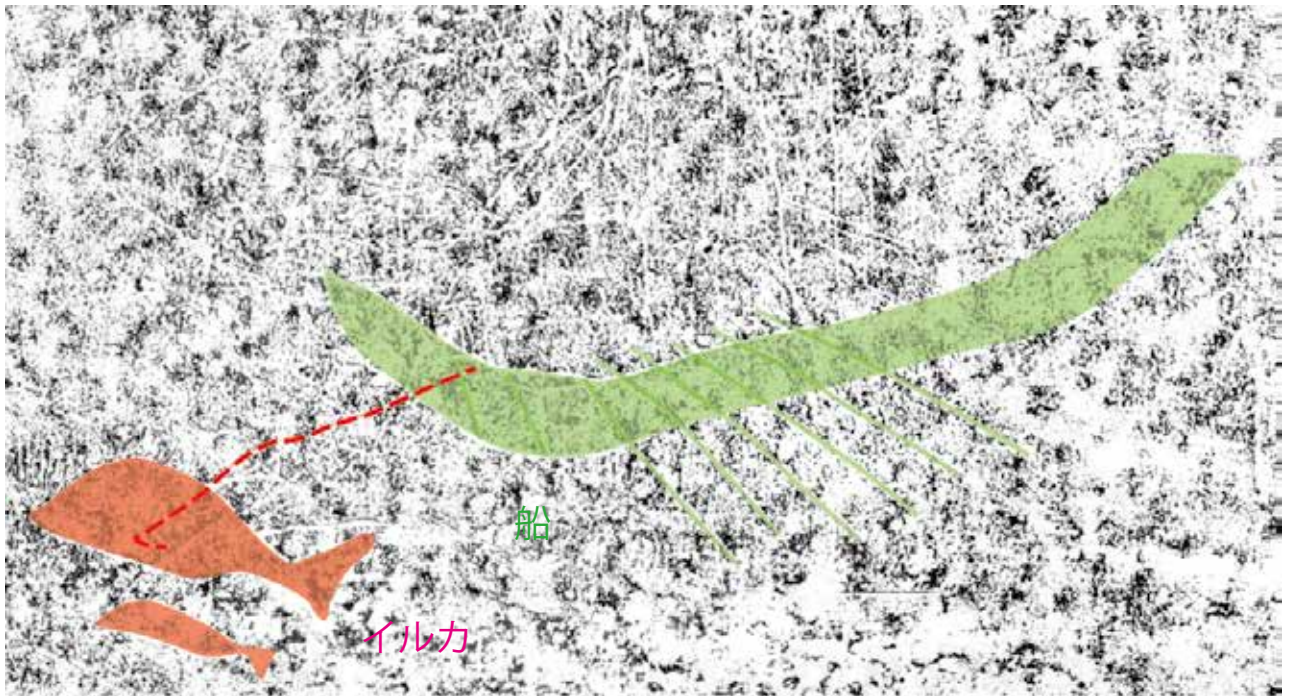
この古墳で珍しいのは、お墓の前室（ぜんしつ）と呼ばれる部屋に使われている石に、何か硬い道具を用いて絵（線刻画：せんこくが）が刻まれているところである。この絵には、少なくとも3艘の船が表現され、船の近くの大きな魚の形をしたものから船に向かって一本線が伸びている。これはイルカを捕らえる様子を示すと考えられている。なお、この絵には、死者を海上の彼方へ送る葬送儀礼が表現さ



鬼屋窪古墳前室の線刻画（『郷ノ浦町の文化財』より加筆転載）



鬼屋窪古墳



鬼屋窪古墳の線刻画（拓本：たくほん）

れているという説、または現世における海上活動の描写であるという説もある。いずれにせよ、絵の中に、イルカが表現されているのである。

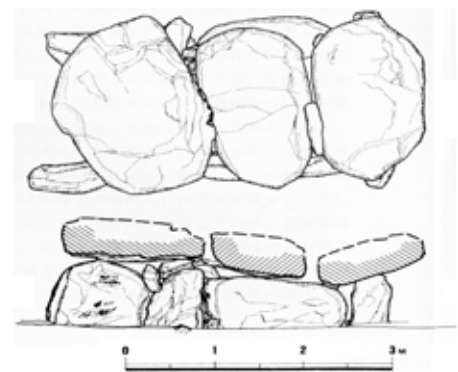
壱岐のあちこちに点在する古墳は、おおよそ1300年もの長きにわたり人々の暮らしの影にひっそりとたたずんできた。これらは当時の人々の暮らしの一端をありありと現代に伝えるものである。また、今回詳しくは紹介しないが、少なくとも縄文時代中期（今から5000年前頃）には、クジラ類を利用していたことが、土器の底に付いたクジラ類の脊椎骨の痕跡から確実である。

兎にも角にも、イルカと壱岐とは長いつながりがあるのである。古墳の線刻画に示されるように、狩猟の対象として、人々にとって重要なものだったこともあれば、漁場を荒らす害獣として、悪者とされたこともあった。

これから先も、壱岐で漁をして暮らす人や、壱岐のイルカパークに観光に訪れる人などのお付き合いは、様々なかたちで続いていくのだろう。

ととのいました！「イルカ」とかけまして、「古墳」と解きます。

その心は、どちらも壱岐（息）が長いでしょう。



鬼屋窪古墳の実測図



土器の底にクジラ類の脊椎骨の痕跡  
（宮下貝塚；五島市（縄文時代後期））

参考文献 壱岐国研究会・九州大学文学部考古学研究室 1981『郷ノ浦町の古墳』  
壱岐郷土館・郷ノ浦町教育委員会 1992『郷ノ浦町の文化財』  
石井敏夫 2014「壱岐のイルカ捕獲騒動回顧録」『島の科学』51号  
浦田和彦 1996「鬼屋窪古墳」『原始・古代の長崎県 資料編Ⅰ』